

## 満州放浪体験記

愛知県 加藤 敏 男

この体験記は自分が体験した戦争の悲惨さ恐ろしさ、外地に於ける敗者の惨めさ哀れさ等、脳裏に焼きついて離れない、忘れることの出来ない思いを綴ったものである。

### ―入隊と軍隊生活―

昭和十六（一九四一）年十二月八日早朝、ラジオが到底勝ち目のない大ばくちを大國米英に挑んだことを報じたころ、私は名古屋陸軍造兵廠に於いて日夜兵器の増産に励んでいた。朝七時から夜七時までの勤務は激しく厳しかったが、一億総決起！

「欲しがりません勝つまでは」の言葉を信じ、物資の不足勝ちの耐乏生活に甘んじながらの勤務であった。緒戦のうちは戦捷に次ぐ戦捷で戦線を拡大していたが、戦況は日増しに悪化し、我が方に

不利な状況が多くなったころ、弱冠二十一歳を迎えた私は甲種合格となり、満州国東滿総省林口県林口の山砲独立守備隊に現地入隊のため、名古屋の野砲兵第八連隊に仮入隊した。

昭和十九年三月十日のことであった。歓呼の声に見送られ勇躍入営した。私は、この日を境に哀れで悲運な運命をたどった体験記の主人公になるうとは誰が想像したであろうか。忘れもしないあのつらい悲しい惨めな敗戦により、異国の地と化した、赤い夕日の満州で、敗残の苦しみの中に生きて故国に帰る忍従を余儀なくされたのである。

当時、私は若き青春を謳歌する年代であった。入隊弱冠二十一歳で、その頃の世相は軍国調一色で、個人の自由はおろか言論の自由なども許されず、戦争を誹謗するとたちまち連行される。人間個人の尊厳とか人権等も考えられない暗黒の時代でもあった。

昭和十九年三月三十一日の真夜中、突然全員たたき起され、完全軍装で宮庭に整列、点呼ののち、

懐かしい肉親家族との最期の面会もなく、極秘のうち夜に夜陰に乗じて、何の命令伝達もなく黙々と行進が始まった。静寂を破って響くは我々の軍靴の音のみ。大津橋通りを南下、熱田神宮に武運長久の祈願をする。玉砂利を踏む軍靴の音も心なしか祈願を済ませた安堵感か何となく軽やかである。黙々と行進は続く。この暗夜の行進が地獄に通ずる道になると誰が予期し想像したであろうか。行進の隊列はもと来た道に戻り、六反を越して笹島に向かう、目差すは名古屋駅である。

当時の名古屋駅は、現在の笹島の貨物駅が国鉄名古屋駅であった。プラットホームに着くと列車の車窓は全部シャッターが降ろされ、陽春三月の末と言っても深夜のホームはまだ風が冷たく感じられ、列車の人となる。発車のベルと共に列車は轟音を立てながら鉄路を西へ西へとスピードを上げひた走りに走る。何の前触れもなく突然列車に乗せられ、行く先も知らされない列車の旅は、不安と焦躁の死出の門出にも似た思いだった。

朝十時頃、列車が停車したのが博多駅であった。下車すると間もなく博多港に停泊中の一、〇〇〇トン余りの軍用貨物船に乗せられ、そこで初めて輸送指揮官から東満州に行くことを知らされた。生れて初めて乗る軍用船、鳥も通わぬ荒海、魔の玄界灘を渡らねばならぬ。空は抜けるように青く雲一点ない快晴、あくまでも蒼い海、晴天なのにさすが魔の海と異名を取るだけあって、だんだんと船の揺れが激しくなり玄界灘に入ったことを知らされる。

船は木の葉のように荒波に翻弄され、船首が波間に沈み、後尾が波間に上るたびに船尾のスクリューの空転する音が「カラカラ」と無気味な音をたてる。一瞬「ナムアミダブツ」と藁をもつかむ心境で念仏を唱え神仏の加護を祈る。

その頃、日本近海や玄界灘にもアメリカの潜水艦が出没し、軍の輸送船や商船が襲撃されたとの報に接する。そんな危険におびえながら救命胴衣に胸を締めつけられ、緊張のうちにも航海の無事

を折る。ますます激しくなるローリングのため激しい船酔いに一人倒れ、二人倒れ、千余人の我々初年兵は釜山港に着くまでの四時間余りの難行苦行は、前途多難を思わせられる試練でもあった。

「ご他聞にもれず私も「ダウン」して、船内の畳の上で船の揺れるがままに体をゆだねていた。昼食の時間が来ても食事に立った者は静岡出身の漁師をしていた四、五人だけだった。気分が悪くなって「便所」に行くまでに倒れ、甲板上に乗りあげた海水に水浸しになり、右に左に転がり回っている者、船内の床面でうめき声をあげている者、他人のことなど考えたり心配などしている心の余裕などまったくない。朦朧とした自分の顔を打ち振り、意識の回復を待ち、少しでも早く釜山港に無事着くことを祈るのみである。

初体験の船旅も無事に釜山に着いた。やっとの思いで一歩一歩船のタラップを降り、遠い釜山の地に一歩を踏み入れた。緑に覆われた内地の山々に比べ赤い山肌を露出した緑のない低い山々の釜

の朝鮮船の差し入れや「万歳！ 万歳」の声に励まされ、鮮満国境へと軍用列車はひた走りに走る。慣れぬ貨車の旅と厳しい寒さのためか体の調子も狂い、やたらと小便が近くなる。何の変哲もない風景にも見あきて次の駅までの停車が待ち遠しい。各停車駅の片隅にはアンペラでかこった急造の仮設された便所があり、列車が到着する度に脱兎のごとく我先にと飛んで行く。

外気の風は冷たいが、狭い貨車の窮屈さと比べると生きた心地がする。体の変調で下痢でもして長く用便をしていると置き去りにされる心配もあり、ゆっくりと用便も達せられない惨めさである。朝鮮北端の鴨緑江を越え、いよいよ鮮満国境の囃門に近づく。この地点は要塞があるとのこと。小窓の戸も閉めるよう伝達がある。囃門を通過、いよいよ満州に列車は入る。

閉ざされていた小窓も開閉を許され、一段と寒さの厳しさが身にしみる。朝鮮の風景と余り変わらない殺風景な中にも、眼下に展開する果てしな

山。「あゝこれが朝鮮南の玄関釜山なのか」と、よくぞここまでとの思いが胸をつく、全員下船、整列点呼の上、小憩後再び荷物同様の貨車の住人となる。どうもその頃の我々は人間扱いされてなかったのかも知れない。一個の消耗品と見なされていたのだろうか？

早春、四月初旬とは云え内地との寒暖の差は余りにも大きく違い、零下一〇度以下の厳寒である。内地を出る時とはまったく様相も変わり、有蓋貨車にムシロが敷かれ、貨車の中央にドラム罐のようなストーブが置いてある。乗車が終了すると戸が外から閉められ、鉄格子をつけた小窓が四つあるだけ。動物なみの惨めさを感じるがそんな感情も無視することく列車は力強い轟音を立てながら一路北へと爆進する。

何時しか家並も見えなくなり、内地の風景に似た田園風景と赤い山脈の山々が貨車の小窓から散見される。途中の沿線沿いで農婦や子供達が日の丸の旗を振って見送って呉れたり、停車駅で慰問

い広野を列車は走る。程なくしてその名も聞いたことのある牡丹江の駅に停車、食事を受領のため少休止となる。食事は各自の飯盒に支給され、進行中の列車内で適宜食事を摂るようにとの指示を受ける。

小一時間程した後で食事をしようと飯盒の蓋を取り飯に箸を立てるが箸が通らない。飯が凍るとは思いも寄らぬ経験で、飯盒を振ると中で「コトコト」音がする。何ごとならんと逆さにして見ると、中の飯がころがり出たのである。完全に凍ってアイスライズと化していたのである。これには「ビックリ」。満州は寒い、小便も凍る程と聞いてはいたが、現実はその寒さの厳しさに直面した。飯にありつくことも出来ず、一層寒さが身にこたえ、泣き面に蜂、みじめなことこの上なしである。零下二〇度と聞いてまたビックリ、内地ならもう桜の蕾もほころぶ季節と云うのに、これから向かう任地は、まだここより寒さが厳しい所だと聞いたときは生きた心地もなかった。

故郷を離れて約一週間、目差す原隊のある東満の林口駅に着いたのは四月七日の夕暮であった。小さな粗末な駅舎と駅周辺に点在する土とレンガで堅めた民家があるだけの広野の村で、遠くを見渡せば灰色に色どられた小高い丘陵が続く大広野が望見され、その中に「ポツン」と点在する建物、これが我々を収用する兵舎である。これが私の人生のうち茨の放浪の生活を余儀なくされ、敗戦の身を異国の地で生きるため、惨めな体験を強いられる羽目になるとは誰が想像したことであろう。

—軍隊生活と転属命令—

私が入隊した原隊の部隊は、当時、泣く子もだまると言われた関特演で鍛えられた関東軍の精鋭部隊で、特に九州、大阪出身の召集兵の古年次兵が多く、精強の猛者連中の集団部隊であった。まず営門まで隊列を組んで行進、営門をくぐるときは長旅の疲れも忘れ、緊張とやや興奮の面持ちで兵舎に入り、それぞれの内務班に配属された。

到着した初日は、遠路はるばる内地から来たお山砲兵のため我々より大切な生きた兵器、馬の手入れと馬小屋の掃除がある。

私も初年兵教育係の上等兵に引率されて兵舎より千メートル以上離れた馬屋に歩を進める。馬小屋は馬糞と排尿でしめった寝藁の異様な悪臭が鼻をつく。コンクリート敷の廊下を中央にして、両側に馬が尻を向けて繋がれている。馬も我々をよく知っているのか初年兵と思つてなめているようで、中には後足を蹴りあげる奴がいて「ギョッ」とする。馬に初めて触れる我々は、皆へっぴり腰のおっかな「ビツクリ」である。

まず手綱の解き方繋ぎ方等教えられ、手綱を解き一頭ずつ引き出し、外の水飲場で水を飲ませるのである。馬に自分の足を踏まれる心配と、暴れ出す心配やらで、恐る恐る手綱をしっかりと握り締め、馬に水を与える。恐る恐る馬の喉に手を当てて水を飲む回数を一つ二つと教え、何回飲んだかを馬名と共に報告するのである。回数の多い少ないでその馬の健康状態を知ると、教えられた。

客さんと云うことで、心尽くしの赤飯にお頭付きの魚に汁粉等でもてなしを受け、泣く子もだまると恐れられた強兵部隊とは、聞くのとは相違しての、余りにも至れり尽くせりの歓待を受け、疲れも忘れ安堵感に浸る思いであった。長年内地を離れての男世帯の味気ない明け暮れの中に、新しい情報を持った我々との話題は尽きることなく、いつしか消灯ラッパの吹鳴がこだまする。この消灯ラッパの合図で藁ブトンのベットにもぐり不安感も孤独感も淋しさも忘れて、兵舎生活第一夜の夢をまじろむ。ペチカの適温に保たれた室内の温かさで安心感でグッスリ寝込んだのも束の間、起床ラッパと共に不審番の「起床！起床！」の連呼で飛び起きる。

まだ不慣れた手付きと遅い動作でやつと服装を整え営庭に整列、点呼を受ける。各班別に週番士官に報告され点呼が済むと、本日の日課が班長から伝達され、第二日目の日程が始まる。食事受領のために週番上等兵に引率されて行く者、兵科が次に馬屋の外の杭に一頭ずつ手綱で繋ぎ、馬体の手入れである。まずブラシを使って馬体のブラッシングを行うのであるが、黒色（アオと言う）、栗毛、鼻柱など馬の毛色、特徴なども教えられ、ブラシの使い方、馬蹄の手入れ、泥落としと油の塗り方である。蹄の泥落としを完全にせずに泥のついたまま油を塗つてごまかすようなことをすると蹄が腐つて足を痛めてしまうと、見るもの触れるもの皆初体験である。

こんなことを日課として、これから否応なしに自分達の手でやらねばならぬことだと思つと気が重くなる。同時に、恐ろしさも忘れてブラシを使う。軍隊生活に入るまでは我々人間程偉いものはないと思つていたのに、ここでは我々人間より馬の方がはるかに上位であり。馬がうらめしい思いであった。

次は寝藁の支度作業である。濡れた寝藁を素手でかえたり、担架に乗せたりして外に運びだし乾燥させる。昨夜は兄貴のように優しくった教育係

上等兵も一夜明けた今日は鬼の上等兵で語気も荒く、大きな声で怒鳴られ、一喝され、気合を掛けられる。馬糞を素手でつかみ馬糞捨て場まで運び出すよう云われる。

心の中では「ウヘー」こんな汚いものかと思いつながら排出間もない「ふかし饅頭」のように白い湯気の立っているものもある。まったく嫌な作業であつたが月日がたつに従つて苦にならなくなり、馬にも愛着を感じるようになった。やらねばならぬ使命感とそこまでにそうさせた人間の順応性のすばらしさに自分ながら感心せずにはいられない。新しいよく乾燥した寝蓐を敷き、又一頭ずつ馬屋に繋ぎ馬糧を与え終わると、はじめて営内で我々の朝食が始まる。

当番が炊事から受領して来た米と麦を混ぜた飯を、アルミの食器に盛り付け、古年次兵が席に着き箸を取つてから、我々初年兵もはじめて「頂きます！」で食事に取りつける。起床からの諸作業で、米麦混合の飯と味噌汁とタクワンだけの粗末

ある日突然、班長に呼ばれ、何か叱られるのかとビクビクしてドアをノックする。個室内に入ると、いつものいかめしい顔つきの班長が優しい眼差しで「実はな！ お前のお母さんが病気で亡くなられた。内地なら特別休暇でも許可してもらい、家に帰してやれるのだが、残念ながらそれも出来ない。つらいだろうが我慢してくれ。今日は一日休暇を与えるから舎内で休養し、お母さんの冥福を祈るように」と突然、母の死の報に接したのです。溢れ出そうになる涙を押さえて、厚くお礼の言葉をのべ班内に戻った。こよなく愛しんでくれた母がもう二度と会うこともなく「死に水」も取つてやることも出来なかつたと、東満の辺境の地より祈るのみでした。

また訓練の明け暮れが始まる。戦友が一人失敗し連帯責任を取らされ、我々初年兵が全員罰を受ける。

「自転車変わり」「ウゲイスの谷渡り」「カッポレ踊り」等などの罰のほかに、時には前歯がへし折

な朝食も非常に美味く感じられる。万事に迅速を旨とするのが軍隊生活、今まで家庭で食事をしてきたようなのんびりとした雰囲気とは似ても似つかぬ気ぜわしさ、まるで流し込むような早さで「頂きました！」の言葉と共に、まだいま食べた物が胃袋まで到着していかないうちに席を立ち、食器の片付け、食器洗い、舎内の掃除、そして午前軍事教練の準備で多忙を極める。

午前六時の起床ラップから就寝の消灯ラップの鳴る時間まで、寸分の暇はおろか、自分の自由の時間さえなく、「こまねずみ」のように働き回り、<sup>かわや</sup>厠だけが唯一の安息の場であり自由の場でしかなかった。こんなことがどうしてやれるのかと思われることでも、我ながらよくやったな！ よくもやれたことだと、不思議にさえ思えることすらあつたのも、「不可能は絶対に許されない」そんな掟にも似た目に見えぬ鎖につながれた、逃げられない何ものかが、日本軍隊の強かつたゆえんでもあろうか？

られたりもする。私もご他聞に漏れず、つらい悲しい恥ずかしい体験が一つ、二つある。

その中の一つを記そう。内務班には初年兵一人に対して戦友がつけられる。ほとんどが自分の親父位の年輩の召集兵で六年く七年位軍隊生活を送っている兵隊である。この戦友の身の回りの面倒を一切見るのである。洗濯物は勿論のこと、兵器の手入れから毛布の上げ下げまで一切合切、自分のことだけで精一杯なのに、もう一人分の面倒を見るのは並大抵のことではない。

とくに私の場合、戦友のほかに班長の面倒まで仰せつかり、班長の当番兵として自分を含めて三人分を極められた時間内にやるのだからどうしてもやれないことが生ずる。そんな時に限つて意地悪く検査があり、必ず槍玉にあげられ、同僚の初年兵も共々制裁を受ける。特に班長（下士官）ともなれば我々初年兵から見れば神様のような存在である。起床ラップの鳴る前に起きて自分の毛布をたたみ、一番上の一枚だけ被つて寝た振りをし

ている。起床ラッパと共にその一枚をたたみ、二階の戦友の毛布を、次に個室の班長を起して毛布をたたみ、急いで点呼の場に駆けつける。

しかしこちらが急いでいるのに、なかなか起きしてくれない。イライラしながら精一杯動くが、点呼の並び順が後部になりがちで、たちまち教育上等兵から「貴様！ 初年兵のくせに何をぐずぐずしているか」との怒声があびせられる。「ハイ、気をつけます」の一語でじっと耐え、その場はそれでおさまるが、また夜の点呼でやられる。点呼のあと必ず「初年兵集合」が掛り「貴様ら点呼の整列が遅い、気がたるんだる証拠だ！ 一列横隊に並べ。足を開き歯を食いしばれ」と声がかかり往復ビンタである。まあ毎夜のように、定期便のように何かないとその日は収まらないのである。

ある日、夜の点呼の際、班長の用件で自分の編上靴の靴紐が時間的余裕がなくて洗ってなく、運悪くその日に限って編上靴の手入検査が行われた。「あゝシマッタ」と思ったがもう遅い。「加藤！

度を越す炎天下での一期の検閲を受け、何となく最強部隊と云われる関東軍の一員らしい体勢が出来あがった。

夏期における湿地帯での踏破訓練がある。見ただけでは水を含んだ大草原のように見える湿地帯も、一步足を踏み入れればズルズルと体も馬も砲も沈んでしまう底なしの泥沼である。ソ満国境にはそのような湿地帯が多く、足を一步踏み入れてジーンと立っているだけでズルズルと自分の体が沈んで行く。馬も、もがけばもがく程、馬体は重量があるだけに沈みこみが大きく、古年次兵より「馬の耳に水を入れたら死んでしまうぞ、どんなことがあっても絶対に馬の耳に気を配れ」と大声が掛る。死に通ずる湿地帯訓練は、恐ろしいうちにも得がたい体験の一つでもあった。

国境線を越えてソ連の戦車が襲来するのを防ぐための陣他構築の演習もきつい重労働であった。頬も落ちるような激しいものだった。それはソ満国境一带に深さ五メートル、幅十五メートル程の

前え出る、貴様。靴紐はなんだおかしくって出来んのか？」と嫌みたらたらの上「たるんでいる！」と一喝、とたんに一発「アゴ」に拳骨が炸裂する。余りの強烈さに一瞬、後によるめきそうになると、「何をヘナヘナさらしとる」とまた一発である。頬の内側が切れて口中血だらけであるが反抗もできない、やられっ放しである。

それだけで済めばこの上であるがそのあとが大変である。編上靴の靴紐と靴紐とをしばり合わせ、編上靴を首に掛け、他の内務班を回るのである。その度に官姓名を名のり、靴の手入れを怠ったこととの詫びの報告をしながら回るつらさ。他の内務班の教育係や古参兵に気合を入れられ、自分の内務班に帰って来ると、班の教育係上等兵から班の対面を汚したと、また最後の一発である。同年兵達も一列横隊に並べられて同時制裁である。世間ではとても予想もつかぬことが平然とまかり通っている。

そんな明け暮れで十二カ月を経過し、真夏四〇

U型の壕を掘る作業である。ツルハシとスコップだけの掘削作業は自分の背丈の二倍余りの高さまで掘り下げ、土をスコップではね上げる。この一週間余の陣地構築の突貫作業を終えた頃には、粗末な食事と天幕生活でゲツソリやつれる。後日終戦間際にソ満国境を越境侵入して来たソ連軍戦車の何台かは、我々の汗と油で築いたこの壕で攔坐し、その機能を失ったことだろうが、その詳細は知る由もない。

そんな苦しいことの多かった生活の中にも、大陸ならではの楽しいと云うか、内地では味わうことのない出来なかつた思い出を少しは体験した。

私が入隊した大陸満州の東満地方は内地のように春夏秋冬の季節はなく、春と夏がいつべんに来て、秋と冬がいつべんに来るのである。内地の初夏である五月になると、今まで地下一メートル余も凍った土の上に、サラサラとした粉雪が一面にあるのみで、周囲の丘陵にも緑の一かけらも望められなかつた殺伐な風景も、ようやく明るい温か

い太陽が顔をのぞかせ、色も日一日と薄緑色を帯びてくる。夏期には底なし沼と化す湿地帯も冬期は完全に凍結し、戦車も通れる程に凍った大地と化す。この湿地帯も夏には再び一面緑の草原に一変する。

ソ満国境にもっとも近い湿地帯の周辺には、甘い芳香を放つ白い可憐な花の咲く鈴蘭が一斉に開花する。山野には雑草の中に混じって自生の「あやめ」「しゃくやく」「ゆり」「りんどう」「野菊」などが一斉に咲き乱れる。激しい訓練の合間の小休止に寝そべって、色とりどりの花の香りにうっとりできるのも、内地では味わえぬ大陸ならではの恩恵でもある。苦しみやつらさに耐える悲しさもいつべんに忘れてしまう。「ふつと」このまま美しい花々の中に埋もれて死んでしまったらどんなに幸福だろうか。

大荒野の東の地平線に大きく燃えるように輝きながら昇ってくる真っ赤な太陽と、西の地平線のかなたに空を真っ赤に染めて静かに沈んでゆく夕

日の荘厳さは唄の一節にある「赤い夕日の満州」そのものであり、大陸ならではの体験できぬ感動の一駒である。

真夏の炎天下では屋根の雀も焼鳥になって落ちてくると言われる程の暑さであるが、一步木陰に入ると額や体の汗も「スッ」と引き、不思議に暑さを感じない。また湿地が少なく空気が程よく乾燥していて、木陰を吹き抜ける風も、何とも云えぬさわやかである。四方を海に囲まれ湿度の多い内地の気温と、果てしない広漠たる原野を抱く大陸の自然との大きな違いを痛切に感ぜずにはいられない。

その頃、南方戦線では血みどろの戦いが展開され、我が軍は不利な戦況にだんだんと追いつめられた。一方、劣勢を挽回し優勢に転じた米英連合軍は、すでに制海空権を完全に握り、内地の大都市への空襲が激しくなってきた。

当時、南満州の鞍山には大きな製鉄所があり、内地より移住した日本人従業員と満人従業員が日

夜、鉄鋼の生産に従事していた。高度一万メートル上空をアメリカの爆撃機 B 29 が飛来するのが頻繁になり、満人が恐れて製鉄所に来なくなったことなどから、急遽、東満州の各部隊から技術者が集められ、鉄の増産と満人従業員の督励を兼ねた作業隊が編成されることになった。

私はその年の末に突如、転属命令を受け、当時の首都新京（長春）に集結を命ぜられた。私も入隊前は名古屋陸軍造兵廠に仕上工として勤務していた関係からか、技術部隊の一員として選抜の対象となった。

各部隊から新京に集結した作業隊は、ハルピンを経由して南満州の製鉄の都・鞍山に到着、技術兵たちは満州第五一五部隊と呼称された。

翌日から雑のうを肩に、腰にはゴンボ剣という軽装で、隊列を組んで工場通いが開始された。巨大な溶鉱炉の材料、広大な圧延工場、まるで生きもののようにローラーの上を這いまわる灼熱の鉄棒や鉄線が溶鉱炉から出て来る「鉄」が凄まじい

火花を飛び散らせる。一トンでも多く生産し、連合軍の物量作戦に立ち向かう覚悟ができた。

私の配属された動力部は貨車の修理や車両のメタル交換等の作業であった。こちらに転属する前に聞いた通り満人の従業員の数はまばらで、作業も何となくダラダラした感じが見受けられ、これでは生産もあがらぬと直感した。私のやる仕事は、大砲、砲弾及び軍艦になる貴重な「鉄」を運ぶ貨車、修理や整備の地味な作業ではあったが、鑪を、鑪を持つ手にも力がこもった。

鞍山の作業隊の兵舎生活も、気温は原隊があった東満の林口とはまるで様子が一変し、兵舎も平屋建の長屋式民家の壁をぶち抜いた畳敷きで、まるで自分の家に帰ったような感じで、東満の部隊のような厳しい訓練や戦友の世話、馬の手入や馬糞に悩まされることもない。しかし日夜兼行で民間人と一緒に真っ黒になって働いた。その甲斐あってか生産も日に日に伸びて部隊長から感謝状が出た位だった。

製鉄所内にも活気がみなぎり、満人の二人とも片言混じりで話しも通じ合うようになり、意志の疎通が若干ながら図れる状態だった。気温も内地と大差なく、真冬でも軍手一双だけで凍傷を起すような厳しさはなかった。東満の原隊で送った兵舎生活と比べると厳しさの中にもまるで極楽のような生活が続いた。

当時、本土の空襲が激烈を極めているとの情報に接してはいたが、内地の肉親の安否や音信もほとんど絶え、全然つかむ術もなく、こちらのももさぞや心配していることだろうと思う。鞍山の街は中国人の経営する店が多いが、客は大半が日本人で、映画館も日本の映画を上映し、結構内地にいるような気分、日曜日の外出は楽しいものであった。

でも転属前の東満の原隊で第一期の検閲後、一等兵に進級、襟の階級章の星が二つになり、襟章を上げげと眺めて喜んだが、鞍山に来て外出するようになって三つ星の上等兵や下士官に敬礼の

以来、終戦に至る満州の軍隊生活、気候・風物、ソ満国境での陣地構築、鞍山製鉄所での技術部隊勤務などを淡々と語られる中で、一般社会の常識とはかけ離れた、特異な生活体験を、感情を込めて語る。

そして体験した戦争の悲惨さ恐ろしさ、外地における敗者の惨めさと哀れさなど、執筆者が脳裏に焼きついて離れない、忘れることの出来ない思いを綴った、と言う。

執筆者は入隊前、名古屋陸軍造兵廠にて兵器の増産に励み、徴兵検査で甲種合格となり、昭和十九年三月十日、満州国東満総省林口県林口の山砲独立守備隊に現地入隊のため、名古屋の野砲兵第八連隊に仮入隊する。勇躍入営したものの『この日を境に哀れな悲運な運命をたどった体験記の主人公になるうとは誰が想像したであろうか。忘れもしないあのつらい悲しい惨めな敗戦により、異国の地と化した赤い夕日の満州で、敗残の苦しみの中に生きて故国に帰る忍従を余儀なくされた』

連続が多く、たまに一つ星の二等兵に敬礼されて答礼するのは、少々優越感らしきものを持ったものだった。激烈を極める南方戦線と違い、空襲もなく、弾の飛び交う直接の戦闘を交えたこともないまま、至極のんびりした生活であった。また厳寒マイナス四〇度を越える酷寒と、四〇度余の酷暑を乗り越えた東満での厳しい自然との闘いにも生き抜き、今度は南満の鞍山で初めての夏を迎えた。

明けて昭和二十年八月に入り、日本は建国以来かつて経験したことのない悲惨な敗戦を味わった。幸か不幸か作業隊として鞍山に転属していた私は、その悲運から一応逃れたものの、東満原隊で苦楽を共にした戦友達の安否を知る由もなく、無事であつて欲しいと心に祈念し、八月十五日の終戦の詔勅を営庭に整列し、涙して聞いた。

#### 【解説】

体験記執筆者は、満州の山砲兵第八連隊に入隊

と記すのである。

極秘と夜蔭の中で黙々と名古屋駅へ着く。車窓はシャッターが降ろされ、何の前触れもない列車に乗せられ不安と焦躁の死出の門出にも似た思いを語る。

博多より軍用貨物船に乗り初めて東満州に行くことを知らされ、魔の玄界灘は揺れが激しくなり、船酔いの難行苦行の試練、床面でうめく者、釜山港に無事着くことを祈るのみである。

満州に近づくにつれ、一段と寒さの厳しさが身に滲みる。食事をしようと飯盒の蓋を取ると完全に凍って転がりです。みじめなことこの上なしである。灰色に色どられた丘陵と広野の中に点在する建物、これが我々を収用する兵舎である。

これが私の人生のうち茨の放浪の生活を余儀なくされ、内務班の扱いを語りつつ、敗戦の身を異国の地で生きるための、惨めな体験を記している。

その後、南満州の鞍山製鉄所があり、爆撃機B29が飛来するのを満人が恐れて製鉄所に来なく

なつたことから、東満州の各部隊から技術者が集められ、鉄の増産と満人従業員の督励を兼ねた作業隊が編成されることになる。

執筆者は、入隊前の経験が選抜の対象となつたのかこの作業隊に転属命令を受ける。鞍山製鉄所作業隊（技術部隊）で満州第五一五部隊（幸二〇四一五）と称された。雑のうを肩に、腰にはゴンボ剣という軽装で、隊列を組んで工場通いが開始された。巨大な溶鉱炉の材料、広大な圧延工場、まるで生きもののようにローラーの上を這いまわる灼熱の鉄棒や鉄線が溶鉱炉から出て来る「鉄」が凄まじい火花を飛び散らせる。

昭和二十年八月、日本は建国以来の悲惨な敗戦を味わつた。作業隊として鞍山に転属していた執筆者は、その悲運から一応逃れたものの、終戦の詔勅を宮庭に整列し、涙して聞いたという。

## 軍隊の思い出

―満州、沖縄、台湾―

富山県 寺井義光

私が農家の長男として生まれて、当然、農業を継ぐ予定で家業に励んでまいりました。軍隊生活について書くとしても戦闘に参加しておりませんが、昭和十七（一九四二）年度の徴兵検査を終え、昭和十八年一月十日、現役兵として富山東部四十八部隊（満州派遣第九師団歩兵第三十五連隊）満州第二百一十部隊連隊砲中隊に初年兵として入隊しました。

二カ月の基礎教育を受け、三月九日晚、満州へ向け富山駅を出発、下関、釜山、延吉を経由して北満の牡丹江省東寧県老黒山にあった本隊の連隊砲中隊へ到着しました。初年兵を待っていた昭和十四年徴集の現役四年兵の方が「初年兵来たか、頑張れ」と我々を励まして、内地へ除隊された笑